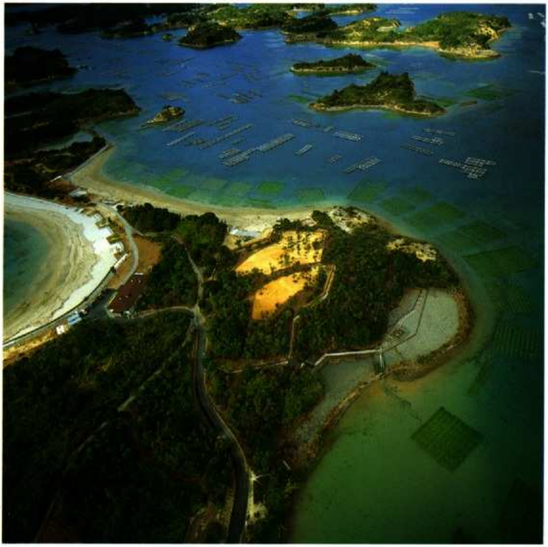
三重県埋蔵文化財調査報告145

次郎六郎東遺跡発掘調査報告

―志摩郡大王町船越―

1996・3

三重県埋蔵文化財センター



序

埋蔵文化財は、それぞれの地域の、そして我が国の歴史を明らかにする上での重要な歴史史料です。また同時に、後世に残さなければならない、私たち共通の大切な文化遺産でもあります。したがって可能な限り現状を保存してゆくことを大原則としておりますが、私たちの社会生活を向上させるための各種の公共事業もまた重要であることは言うまでもありません。そこで、どうしても現状保存の困難な部分については、発掘調査を実施し、記録の保存を図ってきているところであります。

ここに紹介いたします次郎六郎東遺跡の発掘調査結果も、郵政省のリゾート施設建設事業に伴って止むなく実施されたものです。この発掘調査成果が、より多くの方面で活用されることを切望するものであります。

なお文末ながら、協議から発掘調査にかけて多大のご理解とご協力をいただいた郵政省建築部と東海郵政局、大王町及び同町教育委員会をはじめ、発掘調査にご助力をいただいた地元の方々に心より感謝いたします。

平成8年3月

三重県埋蔵文化財センター

所 長　川 村 政 敬

例　　言

1．　本書は、三重県教育委員会が郵政省から委託を受けて実施した、伊勢志摩リゾート施設（仮称）建設事業に伴う、志摩郡大王町船越字次郎六郎に所在する次郎六郎東遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。

2．　調査は、下記の体制で行った。

調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
　　　　　調査第２課　第２係
　　　　　　係長　　田村陽一
　　　　　　主事　　小林　秀
調査協力　伊勢市立北浜中学校
　　　　　　教諭　　角谷泰弘（三重県文化財調査員）

3．　調査にあたっては、大王町及び同町教育委員会、ならびに地元の方々のご協力を得た。

4．　発掘調査後の出土遺物の整理は、調査担当者の他、池田金子が行った。また、出土遺物の実測は、北川ゆき、脇葉輝美、山路艶子、中村敬子が行った。

5．　本書の執筆・編集は、小林が担当した。なお、本報告書の執筆等に際しては、以下の方々からご助言をいただいた。

伊藤裕偉・奥義次・竹内英昭・西村修久（順不同、敬称略）

6．　挿図の方位は、全て真北を用いた。なお、当地域の磁針方位は、西偏６°２０′（昭和55年）である。

7．　本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8．　遺物実測図の番号は、写真図版の遺物番号と対応させてある。

9．　本書で用いた遺構表示略記号は、下記のとおりである。

ＳＫ：土坑　　ＳＢ：礎石建物

10.　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　言 …… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 4
Ⅲ　発掘調査の成果 …… 11
Ⅳ　結　語 …… 20

図　版　目　次

ＰＬ．１　Ｂ区調査前風景
ＰＬ．２　Ａ区調査前風景・Ａ区伐開後風景
ＰＬ．３　Ｂ区伐開後風景・Ｂ区調査作業風景
ＰＬ．４　Ｂ区全景・Ａ区全景
ＰＬ．５　ＳＢ１・ＳＢ２
ＰＬ．６　集石遺構・調査区全景
ＰＬ．７　出土遺物(1)
ＰＬ．８　出土遺物(2)
ＰＬ．９　出土遺物(3)・遺跡遠景
ＰＬ．10　登茂山全景

挿　図　目　次

第１図　試掘坑位置図
第２図　遺跡位置図
第３図　遺跡周辺地形図
第４図　調査区位置図・仮設防災工区位置図
第５図　遺構平面図・地形測量図
第６図　調査区小地区割図
第７図　集石遺構平面図・立面図
第８図　ＳＢ１平面図・立面図
第９図　出土遺物実測図(1)
第10図　出土遺物実測図(2)
第11図　出土遺物実測図(3)
第12図　出土遺物実測図(4)

表　目　次

第１表　試掘結果一覧表
第２表　出土土器観察表
第３表　器種構成比率表

Ⅰ．前　　言

1．調査に至る経過

三重県教育委員会では、国および県にかかる各種公共事業に関連して、事業予定地内の文化財の確認と、その保護に努めてきているところである。

次郎六郎東遺跡は、郵政省による伊勢志摩リゾート施設（仮称）の建設予定地内に所在している。縄文時代の遺物が多く採集されている次郎六郎遺跡に隣接しているところから、平成５年度に三重県埋蔵文化財センターの調査第２課が中心となって分布調査を行い、平成６年度には同じく調査第２課によって範囲確認調査が実施された。その結果、縄文時代以前の遺物・遺構はほとんど発見できなかったが、山茶椀などの陶器類がまとまって出土し、中世前期の遺跡の所在することが確認された。

なお、範囲確認調査の詳細については、第１図と第１表を参照されたい。また、遺跡の所在地の小字名は次郎六郎であるが、次郎六郎遺跡と区別するために次郎六郎東遺跡と命名されている。

その後郵政省と保存に向けての協議を行ったが、次郎六郎東遺跡の範囲の内、約2,000㎡について本調査を行うことになった。調査に先立って、予想される土砂流出を防止するための防護柵の敷設工事が実施され、その際に、遺跡範囲内にかかる部分については立会調査を行った。

本調査は、調査区を丘陵頂部と丘陵斜面部に分け、前者をＡ区、後者をＢ区とし、Ｂ区から調査を開始した。現地での発掘調査業務は、平成７年10月２日から開始して、翌平成８年１月12日に完了した。表土及び包含層の掘削には重機は用いず、全て人力で行った。また、調査にあたっては、調査終了後の現地復元に配慮して、立木を極力残す方針をとった。

2．調査日誌抄

平成７年

- ９月27日　防災工事Ｂ工区の立会調査を行う。陶器甕片・山茶椀片が出土。遺構は検出できず。
- ９月29日　防災工事Ａ工区の立会調査を行う。少量の山茶椀片や陶器甕片などが出土したが、遺構は検出できず。
- 10月13日　地区設定の確認。午後からベルトコンベアーの設置を行う。
- 10月16日　Ｂ区から本掘削を開始する。厚さ10cmの羊歯根の除去を行う。掘削は、Ｂ区の南側から行う。
- 10月18日　Ｂ区南の包含層から、接合完形を含めて、山茶椀片がまとまって出土し始める。遺構に伴うものではなく、投棄されたものと判断。
- 10月19日　包含層掘削および遺構検出の範囲を、Ｂ区中央の尾根部分にまで拡大する。
- 10月23日　Ｂ区中央尾根から南伊勢系鍋片が出土する。
- 10月25日　Ｂ区南側で、斜面を掘削して造った平坦面を確認。
- 10月27日　Ｂ区の調査範囲の約半分の検出を完了する。
- 10月30日　Ｂ区北側の包含層掘削を開始する。
- 11月２日　Ｂ区北側の包含層は厚く、掘削に手間取る。また、遺物の出土量が極端に減少する。
- 11月７日　Ｆ－９で土坑を検出。土師器鍋片が出土する。
- 11月８日　Ｋ－13で土坑検出。焼石・炭化物を含むが遺物はなし。

第１図　試掘坑位置図（１：3,000）

試掘坑No.	遺物包含層上面の深さ	遺構上面の深さ	遺構	遺物	備考
1	－cm	－cm	なし	なし	表土流出
2	10	25	なし	土師器・山茶椀・山皿	
3	5	20	なし	土師器・磨石	
4	－	－	なし	なし	表土は殆ど流出
5	－	－	なし	なし	表土流出
6	5	20	なし	土師器・山皿	
7	5	15	なし	石器剥片	
8	10	20	なし	土師器・山茶椀	
9	10	20	なし	なし	
10	－	－	なし	なし	表土流出
11	10	25	なし	土師器・山茶椀・チャート剥片	
12	10	25	なし	土師器・山茶椀・陶器	他に土錘・皿等出土
13	10	20	なし	磨石片	
14	5	5	なし	なし	包含層なし
15	5	25	なし	なし	
16	10	20	土坑？	山茶椀	
17	10	25	なし	山茶椀	
18	10～15	20～40	なし	陶器甕	
19	5	5	なし	なし	包含層なし
20	5	20	なし	土師器・山茶椀・山皿	
21	10	45	なし	土師器・山茶椀	遺物多量
22	5	30	なし	土師器・山茶椀・青磁	他に陶器・鉢等出土
23	10	25	なし	土師器・山茶椀・陶器	
24	－	－	なし	なし	表土流出
25	－	－	なし	なし	表土流出
26	10	25	なし	なし	
27	5	20～25	なし	なし	土層攪乱
28	5	15～20	なし	なし	表土削平、基盤露出
29	5	25	なし	なし	
30	－	－	なし	なし	削平
31	5	20	なし	なし	
32	5	15	なし	なし	
33	5	15	なし	なし	
34	5	20	なし	なし	
35	5	20	なし	なし	
36	5	20	なし	なし	
37	5	15	なし	なし	
38	5	15	なし	なし	
39	5	20	開墾溝？	なし	
40	5	20	なし	なし	
41	5	15	なし	なし	
42	5	10	なし	なし	
43	5	20	なし	なし	
44	5	20	なし	なし	
45	5	15	なし	なし	
46	5	15	なし	なし	
47	5	15	なし	なし	
48	5	20	なし	なし	
49	5	20	なし	なし	
50	5	20	なし	なし	開墾時の土管
51	5	25	なし	なし	

第1表　試掘結果一覧表

Ｉ－11で、縄文時代の集石炉らしき土坑を検出する。

11月13日　Ｂ区北側で、礎石を伴う建物跡を確認する。
包含層の厚さが80cmに達する。

11月14日　調査区中央部Ｈ－９付近でも、地山を掘削した平坦地を検出する。ピットや礎石はないが、建物跡と判断する。

11月17日　Ｂ区北側包含層から、完形の磨製石斧が出土する。

11月22日　Ｂ区の包含層掘削及び検出を継続。
Ａ区の羊歯根除去を開始する。

11月28日　Ｂ区の調査をほぼ完了する。Ａ区のベルトコンベアーを設置する。

11月29日　Ａ区の包含層掘削を開始する。

12月１日　Ａ区の調査の過半を終了する。
調査第２課会議を次郎六郎東遺跡の現場で行う。

12月４日　Ａ区で焼土痕跡を数か所検出する。

12月７日　Ａ区の焼土を断ち割る。本日で現場での発掘作業をほぼ終了する。

12月19日　調査区Ａ・Ｂの清掃。

12月20日　スカイマスターによる写真撮影。

12月23日　集石遺構の平面と立面の実測。

12月26日　調査区Ａ・Ｂの清掃。

12月27日　ラジコンヘリによる写真撮影と調査区の測量。

平成８年

１月８日　埋め戻しの作業が始まる。

１月９日　Ａ区で最終確認のためのトレンチ調査を行う。

１月12日　資材及び遺物の搬出。

Ⅱ．位置と歴史的環境

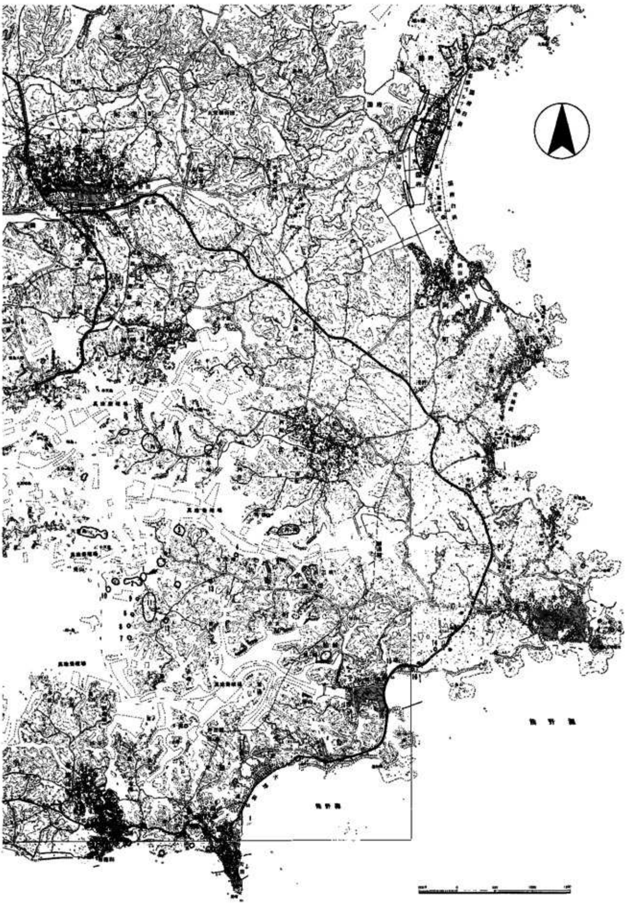
次郎六郎東遺跡(1)は、英虞湾内の最奥部、湾内を一望できる標高48ｍの登茂山の北西に突出した小半島の、付け根付近の丘陵上に所在する。行政的には、三重県志摩郡大王町船越字次郎六郎に位置している。付近一帯は隆起海食台地で、平地は極めて乏しく、切り立った複雑な海岸線が続いている。

当遺跡は、標高10ｍ程の丘陵頂上部及び西斜面を中心に広がっている。現況はアカマツやウバメガシを主体とする山林で、地表は羊歯類によって厚く覆われている。周囲の海岸は、現在では人工の砂浜となっているが、かつては遠浅の磯であった。海面が眼前に迫り、また英虞湾内への眺望もよい。当遺跡の立地条件の、地形的な特徴の一つである。

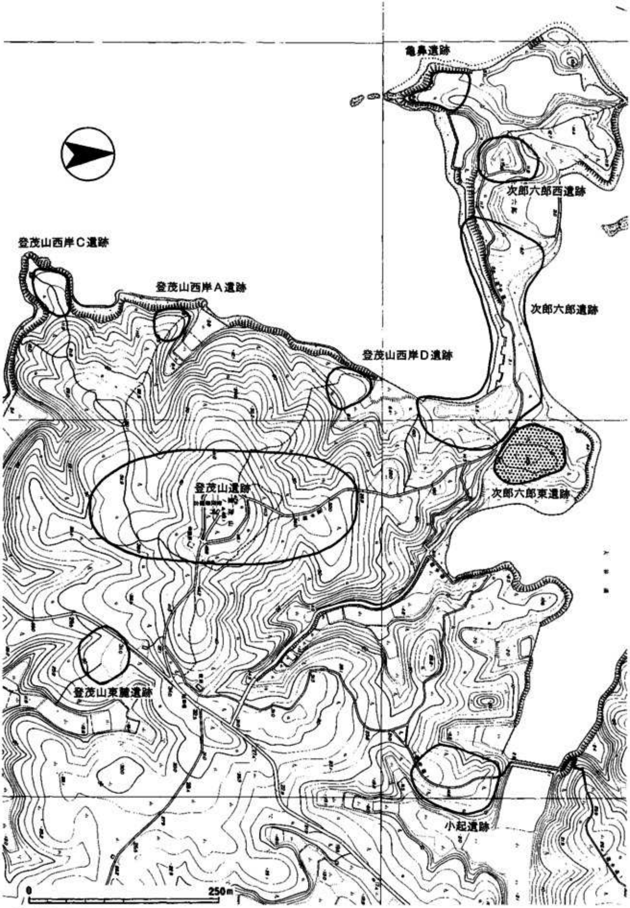
さて、登茂山の一帯は、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が集中しているところとして知られている。これらの成果は、地元の佐々木武門氏による精力的かつ綿密な踏査の努力によるものである。特に当遺跡の西に隣接する次郎六郎遺跡(2)では、多量の石器類が採集されている。[1]このことは、今回の調査では確認できなかったものの、付近に住居跡の存在する可能性を強く示唆している。

このほか登茂山一帯には、海岸線を中心に縄文時代の遺物散布地が点在している。登茂山の半島の北側にも波切友山遺跡(3)や当茂地Ａ・Ｂ遺跡（４・５）などが所在するが、特に登茂山の西に位置する海岸線には、登茂山西岸Ａ～Ｄ（６～９）の４遺跡が知られ、先の次郎六郎遺跡や小半島先端の亀鼻遺跡(10)などを含め、登茂山の半島の南西に集中する傾向がある。これは、日照などの自然条件による居住性と無関係ではないであろう。また、登茂山遺跡(11)や登茂山東麓遺跡(12)、野田遺跡(13)などの半島内陸の縄文遺跡も知られているが、海岸線に集中するのは、山と海の迫る志摩地域の海岸線地形が、食料の採取にとってより好都合であったためと考えられよう。

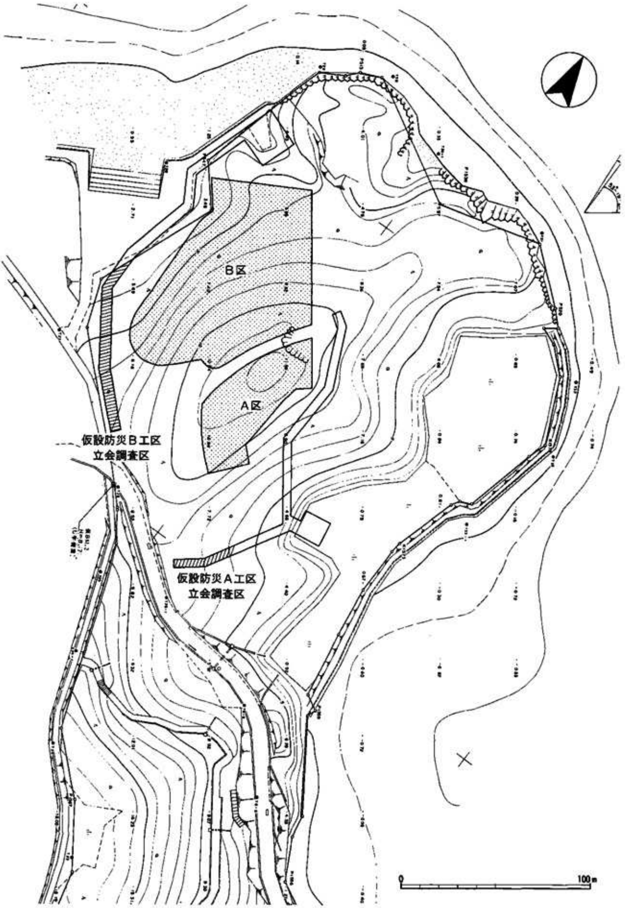
このように、志摩地域、特に大王町域では、縄文時代以前にまで遡る人々の生活の痕跡を数多く見出すことができる。ただ弥生時代に入ると、若干の様相の変化が見られるようになる。当遺跡の所在する大王町域に限定して見た場合ではあるが、七本松神社遺跡(14)や山寺遺跡(15)・神宮寺遺跡(16)などの弥生時代遺物の散布地を、若干の平坦地のある船越周辺で確認できるものの、縄文時代以前の遺跡に比べて、その密度がやや低下する傾向がある。耕地となり得る平地の乏しい地形的条件に規制されての、生活様



第２図　遺跡位置図（１：50,000）　国土地理院「安乗」「浜島」「磯部」「片田」「波切」１：25,000より



第３図　遺跡周辺地形図（１：5,000）



第4図　調査区位置図・仮設防災工区位置図(1：1,000)

式の変化を想像させるものである。それに対して、乏しいながらも相対的に平地の多い阿児町域では、遺跡の分布状況からは大きな変化は見られないようである。

古墳時代に入ると、志摩地域は一気に活気づいてくる。5世紀後半の築造とされる阿児町志島のおじょか古墳（志島古墳群第11号墳）(17)や、30m級の前方後円墳である泊古墳(18)・鳶ヶ巣1号墳（大王町畔名）(19)などの在地首長級の墳墓をはじめ、多くの群集墳の存在が確認されていることが、そのことをよく示している。こうした古墳時代の志摩地域の在り方は、律令制下における志摩国の在り方や位置づけとも深く関係するものと考えられる。

律令制下において志摩国は、答志・英虞の2郡で構成されていた。もっとも、当初は一国一郡であった。耕地に乏しく、班田も自給できなかった志摩地域が、下国ながらも国として編成・維持された背景の一つは、その豊富な海産資源であったことは周知のことであろう。このことは、平城京跡などから出土した多くの木簡の記載内容からも窺い知ることができる。

それによると例えば、養老7年（723）には答志郡和具郷から海藻6斤が、[2] また天平17年（745）には英虞郡名錐郷（波切）から交易品とも解釈できる耽羅鰒6斤が[3]調として貢納されている。その他、当遺跡の立地する船越の地名を記した天平神護2年（766）の木簡も出土している。[4] 更に『延喜式』[5]には、志摩国からの調として、実に多種多様な海産物も記載されているのである。すなわち、律令国家にとって志摩国は、豊富な海産物の供給地として位置づけられていたのである。

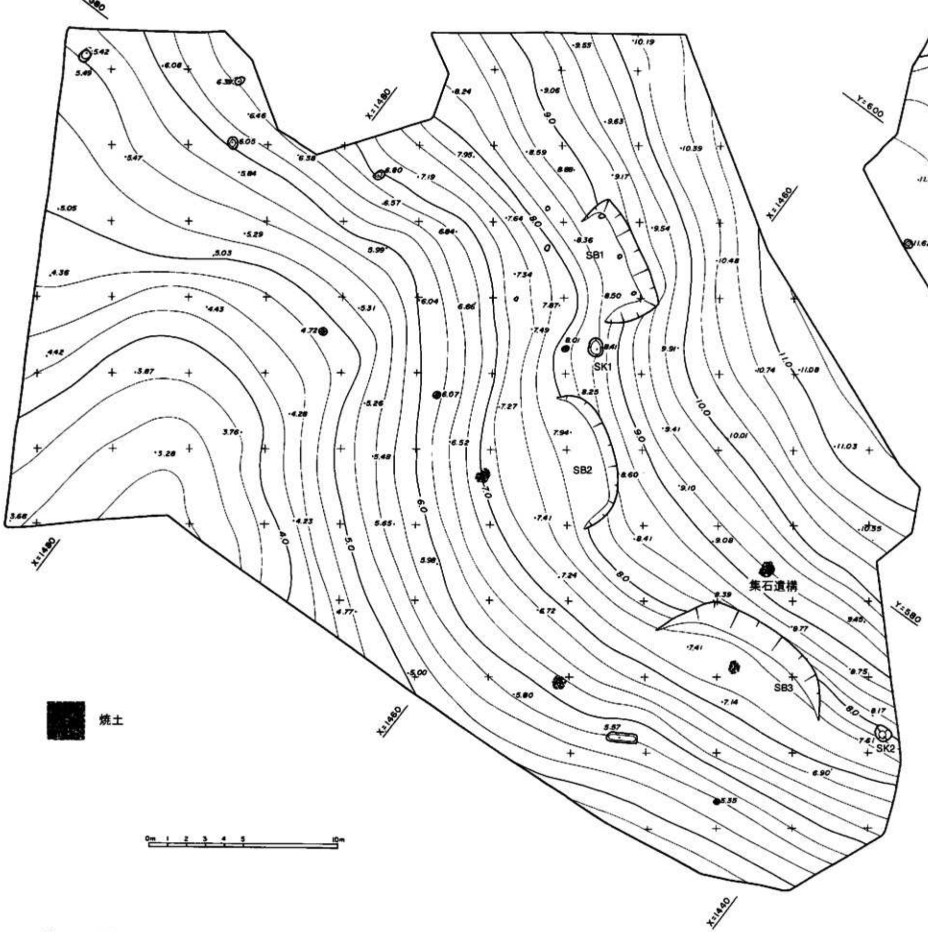
次に古代以降の志摩地域を考える上で重要なのは、ここが海上交通上の要地であり、船を用いた物資の運搬・交易の中心地の一つでもあったことである。『万葉集』に収められた7世紀末の柿本人麿の3首の歌[6]は、伊良湖水道を通る古代海路の存在を彷彿とさせるものがある。また、先に触れたおじょか古墳の石室の構造が、北九州系であるとされている[7]ことは示唆的であり、海を介しての志摩地域の活発な活動を、5世紀段階にまで遡らせ得る可能性を示している。このことを考慮に入れるならば、波切郷から貢納された耽羅鰒は、まさに朝鮮半島との交易品であった必然性は高いものと考えられよう。

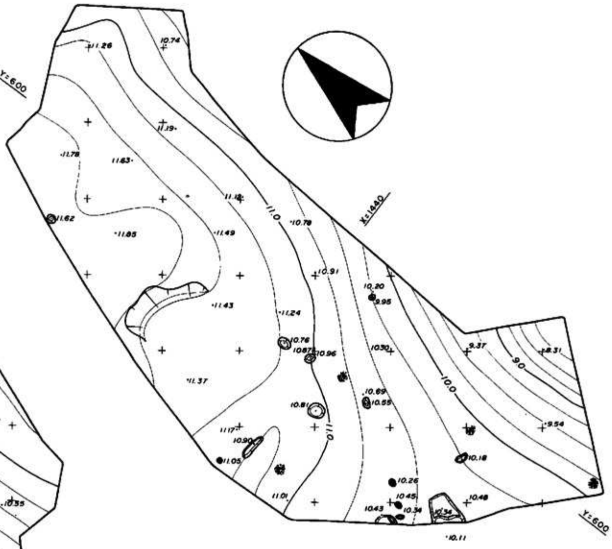
中世に入ると、志摩地域でも摂関家勧学院領和具荘や、相佐須（相差）荘・荒島（安楽島）荘などの荘園が多く成立する。特に、別宮の伊雑宮や国崎神戸などが所在していたこともあって、伊勢神宮との関係が深い。鎌倉時代中期から南北朝時代の神宮領を集成した『神鳳鈔』[8]には、志摩地域だけで実に70か所以上もの御園・御厨が記載されている。こうした状況は、志摩地域がもたらす豊富な海産資源と海上交易の利潤の大きさを考慮しなければ理解できない。

中世後期には、和具や相差・的屋氏などの、複雑な海岸線に形成された入江・浜を中心とした「海の領主」とも言うべき存在を、文献史料によって確認することができるのである。彼らの船は、主に東海から東国に分布していた伊勢神宮領からの神税を運搬する神船として把握されることで、諸湊での課役を免除されていた。彼らは、そうした特権を以て活発な交易活動を展開していたのである。中でも、鎌倉時代末期に、阿久志（鳥羽市）を本拠に活動していた斎藤藤内左衛門入道道妙の存在は特筆される。[9]

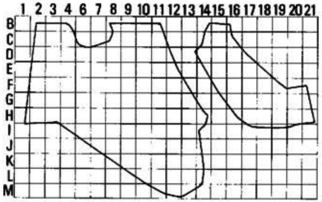
彼は、舎弟の定願を駿河国江尻に居住させて中継の拠点とするなど、一族を中核として東国と活発な交易を行っていた。交易の具体的な品目については明らかではないが、建武3年（1336）の用途請取状[10]案によると、その時の交易の利潤は、舎弟定願の取り分だけで150 貫文であった。更に、道妙が死の間際に仕立てた関東船4隻分では、総額は実に1,000貫文にも達しているのである。[11]

当時1反の田畑が3～5貫文程度で売買されていたことからすれば、諸経費を差し引いたとしても、その利潤の莫大さは想像して余りある。建武4年の道妙後家法宗の申状には、[12]「四艘之船并千余貫之銭貨」と記されている。つまり帰路の船には、交易による銭貨が満載されていたのである。恐らく彼らの主な交易場所は、鎌倉であったとみてよいであろう。そして、こうした船による交易を行っていたのは、決して道妙だけではなかったのである。このことは元弘元年（1331）10月、泊浦小里（鳥羽市）の紀内船と阿久志の虎王次郎船が衝突し、関東よりの銭貨





第５図　遺構平面図・地形測量図（１：200）



第６図　調査区小地区割図（１：1,000）

31貫文を積んだ紀内船が沈没していることからも明らかである。

志摩地域はやがて、熊野から波切に進出した九鬼氏によって席巻され、織豊政権時代を経て近世をむかえる。

Ⅲ．発掘調査の成果

1．遺　構

今回の発掘調査では、調査区を標高10m程の丘陵頂部と、海に面した西斜面の２区に分け、前者をＡ区、後者をＢ区として開始した。調査区内の小地区は、両調査区の北東辺を基準として、一辺４ｍを１グリットとして設定した。

一帯は、10cm以上もの羊歯根に深く覆われ、またイバラや立木の根にも阻まれて、掘削に手間取った。基本的に土層は２層で、羊歯根を除去すると、淡褐色で砂質の遺物包含層が現れ、さらにこの層を除去すると、黄褐色ないしは赤褐色の、やや粘土質の土層に達する。この層を基本的に地山と判断し、検出面とした。また包含層には、満遍なく微量の炭化物が含まれていた。

(1)　Ａ区の調査

Ａ区は、丘陵の頂部であるわりに遺物包含層は厚く、20cmから40cmで検出面に達する。ただ包含層からは、ほとんど遺物は出土しなかった。

遺構としては、土坑や小穴が若干と、地山が直接径30cm程焼けているところを５か所検出した。しかし、埋土や遺構の周辺からは遺物は出土せず、いずれも時期や性格については判然としない。

(2)　Ｂ区の調査

Ｂ区は斜面であり、しかも傾斜が比較的急であるため、淡褐色砂質土の遺物包含層は高位ではほとんど認められないが、低位に行く程急激に深くなる。南西側で50cm、北西側で検出された小谷では、包含層の厚さは部分的に80cmにも達した。またこの小谷部分のみは、固く締まった白褐色の砂を検出面とした。

集石遺構　最大径約90cm程の、やや歪な楕円形の土坑に、人頭大から拳大の石が相当数入っている。深さは、斜面の高位で約20cmである。

入れられていた石の大多数は角張った山石であるが、中には周辺の海岸線から持ち込まれたと見られる丸石も含まれている。また若干数ではあるが、焼け石と見られるものも含まれていた。

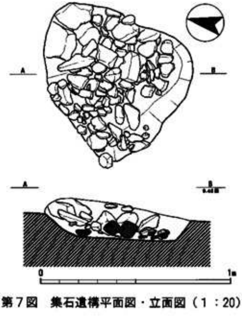
人為的なものであることは疑いないが、遺物は出土せず、確定できない。ただ、隣接する次郎六郎遺跡で表面採取された遺物や他の類例から見て、縄文時代早期の集石炉である可能性もある。

礎石建物　推定も含めて３棟検出された。

最も残りのよいＳＢ１は、丘陵の斜面を、長辺約6.2m、短辺約３ｍの「コ」字状に掘り下げ、平坦地を確保している。また掘り下げた斜面の下端に沿って、幅約10cmの排水溝を設けている。

礎石は、南北方向の２間分、計３個を検出した。礎石には、人頭大で偏平な石が用いられ、造成された平坦面に直接置かれていた。礎石を据えるために、地山を掘り下げた形跡はない。

柱間は、礎石の中心での計測で、約2.1から2.3mであった。建物の東西辺については、崩落のため規



第７図　集石遺構平面図・立面図（１：20）

模は明らかではない。ＳＢ１の西には、礎石に用いられたと考えられる崩落した石が幾つか認められた。ただ、ＳＢ１の北西隅に当たると見られる礎石は、方向的にも、また高さから見ても大きな矛盾はなく、原位置を保っている可能性がある。この場合、地山掘り下げの際に出た土を斜面に盛って整地し、平坦面を拡張していたとも考えられる。

ＳＢ２及びＳＢ３については、礎石や排水溝は検出されなかったが、ＳＢ１と同様の人為的な造成平坦地であることから、建物跡と判断した。

土坑　ＳＫ１は、直径約90cm、深さ約15cmの円形土坑である。やや大きめの土師器鍋片が出土した。位置的にＳＢ１に関連するものと考えられる。

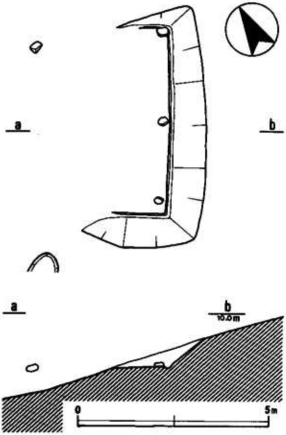
ＳＫ２は、長径約90cm、短径約60cmの楕円形の土坑で、摺り鉢状に掘り下げられている。深さは約30cmである。埋土には、焼けた砂岩質の石片や炭化物、焼土塊などが含まれていた。遺物はなく、年代・性格ともに不明である。

その他の遺構　調査区の北隅付近で、小穴を幾つか検出した。直径は40cm程だが、非常に深く、かつ斜めに掘られている。狐狸などの巣穴ではないかと考えられる。

この調査区でも、Ａ区同様、地山の焼けたところが３か所検出されている。やはり性格等については憶測の域を出ないが、その内の一つがＳＢ３の造成平坦面で検出されたことは示唆的である。少なくとも年代的には、これらの建物と併行する可能性を指摘することができるものと判断される。

2. 遺　物

遺物は、包含層から出土したものがほとんどで、しかもＢ区の南側に集中する傾向があった。また器種としては、山茶椀と山皿が大部分を占めている。



第８図　ＳＢ１平面図・立面図（１：100）

土器類では完形で出土したものはなく、いずれも細かく割れていた。ただ、破片の接合率は高く、かなりの広範囲で接合された。

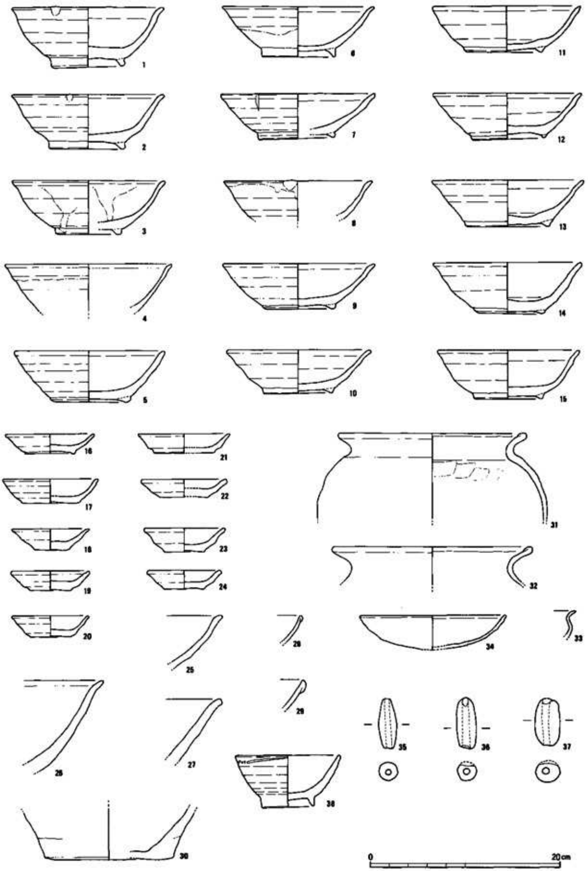
(1) 土器類

山茶椀　図示した１～15の山茶椀の内、４はＳＢ１から、５は前年度の試掘調査（No.21）で出土したものであるが、それ以外は全てＢ区の包含層からの出土である。

１は、Ｌ－13からの出土である。体部は丸みを持ち、口縁を若干外反させる。器壁は厚く、相対的に深い器形である。口縁端部には、外面からの指によると見られる輪花が復元４か所に施されている。外面には、薄く自然釉がかかる。底部外面には糸切り痕跡を残すが、ナデによって消されている。底部内面は、磨られたように滑らかである。

２はＬ－13を中心出土し、破片の一部はＫ－13に及ぶ。器壁は厚めで、直線的に立ち上がり、口縁を小さく外反させる。口縁端部には、指による輪花を施す。底部には糸切り痕跡を残すが、ナデによって消されている。口縁外面から体部内面にかけて、自然釉が厚くかかる。高台端部には、籾殻痕跡が少し残る。

３はＬ－12からの出土である。体部は丸みをおび、口縁をすこし外反させる。輪花はないが、灰釉が漬け懸けされており、内面には自然釉もかかる。底部



第９図　出土遺物実測図(1)（１：４）

内面は、磨られたように滑らかである。

4はSB1からの出土である。器壁は薄く、直線的に立ち上がって、口縁を小さく外反させる。口縁外面から内面には、灰釉が厚くかかっているが、自然ではなく、漬け懸けされたものである。

5は、試掘坑No.21からの出土で、ほぼ完形である。器壁は厚く直線的で、そのまま口縁端部で丸く収束する。自然釉のかかりは見られない。

6はI－10とL－13からの出土である。高台径も大きく、開いた浅めの器形である。口縁をすこし外反させる。口縁外面から内面全体に、灰釉が厚く漬け懸けされている。口縁の残存が6分の1ほどなので不明瞭だが、輪花も施されている。

7は、M－12と13から出土した。器壁は厚めで、浅い器形を持つ。口縁には4か所に、工具による輪花が施される。底部内面は、何かを磨ったように磨滅する。内面の口縁から体部にかけて、自然釉が薄くかかる。底部外面には、偶発的についたと見られる工具（竹か）の痕跡が残る。また高台端部には、籾殻痕跡がある。

8は、L－13とM－12から出土した。口縁の内外面には、灰釉が薄く漬け懸けされている。また、指による輪花が施される。

9は、M－13からほぼ完形で出土した。器壁は薄手だが、胎土は粗い。口縁外面から体部内面に、厚く自然釉がかかる。焼き歪みが大きく、外面には重焼きで釉着した別個体の口縁部が大きく付着する。高台には、籾殻痕跡がよく残る。

10は、L－13からほぼ完形で出土した。自然釉のかかりは見られない。高台には籾殻痕跡を残す。

11は、K－13とL－13から出土し、ほぼ完形に接合できた。焼き歪みが大きいが、大振りで浅い器形を持つ。口縁外面から体部内面に自然釉がかかる。底部内面は、何かを磨ったように磨滅している。

12は、K－13からの出土である。器壁は薄手で、直線的に立ち上がり、口縁を少し外反させる。自然釉のかかりは見られない。高台には籾殻痕跡をよく残す。

13は、L－12からの出土である。体部は直線的で、口縁を外反させる。胎土は粗い。口縁外面から内面には、自然釉が厚くかかる。高台には籾殻痕跡をよく残す。

14は、L－13からの出土である。器壁は厚く、やや深い器形を持つ。口縁外面から内面には、自然釉が厚くかかる。高台には籾殻痕跡を残す。底部内面は、磨られた様に滑らかである。

15は、L－9からの出土である。丸みをおびた、深い器形を持つ。内面には自然釉が薄くかかり、高台には籾殻痕跡をよく残す。

山皿　山皿はB区の包含層から20個体ほど出土し、その内、図面上で完形に復元できるものについて、昨年度の試掘で出土したものも含めて図示した（16～24）。

底部は無高台で糸切り未調整のものが殆どだが、16には低い貼り付けの高台が付く。またナデで糸切り痕跡を消しているものもある。

陶器鉢　25は昨年度の試掘調査で、また27は仮設防災工事のB工区の立会調査で出土した。

25の内外面には、自然と見られる灰釉がかかる。小片ではあるが、口縁の歪みから片口の鉢と見られる。

26の内面には、自然釉がかかっている。外面の下部は、回転によるヘラケズリで調整されている。

27の外面には鉄釉が、内面には厚く灰釉がかけられている。

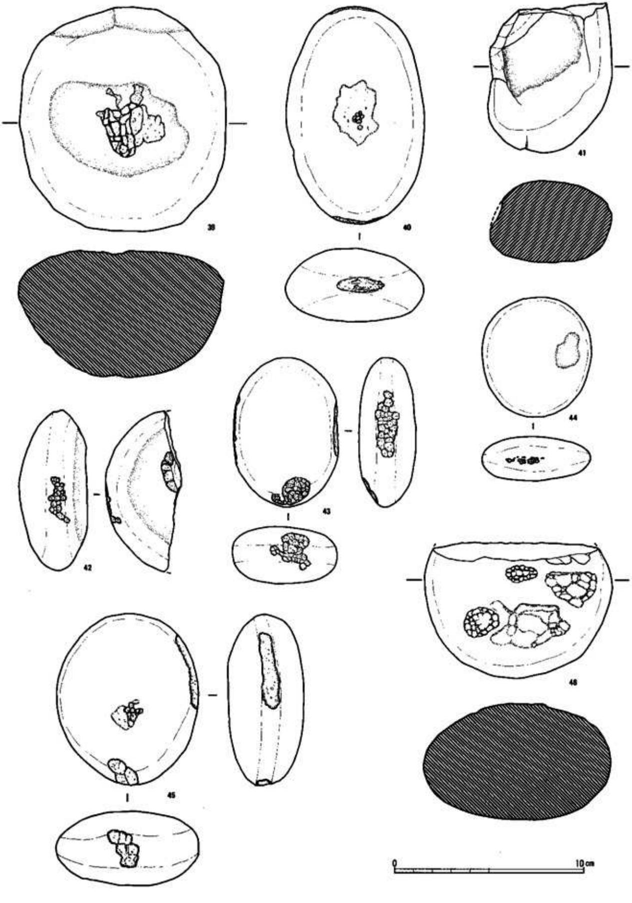
陶器甕　30は、仮設防災工事のB工区の立会調査で出土した。底部外面は未調整である。外面には鉄釉を施し、内外面には自然釉が厚くかかる。

磁器椀　磁器椀はほとんど出土せず、図示した2点の細片のみであった。

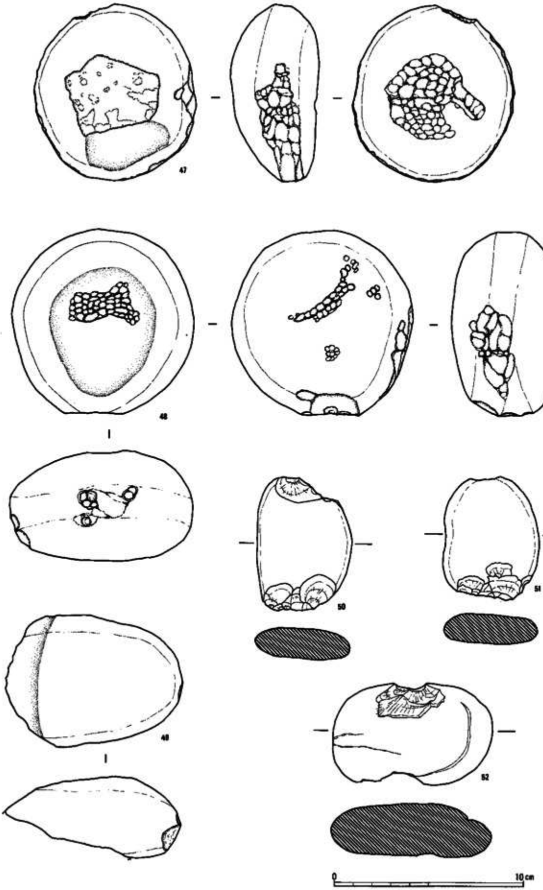
28の口縁端部は外に折り返され、細い縁帯をつくっている。器壁は薄く、やや小振りの白磁椀と見られる。

29も白磁の椀で、口縁端部を外に折り返し、縁帯をつくる。外面の施釉は口縁部付近までで、過半は無釉であると考えられる。

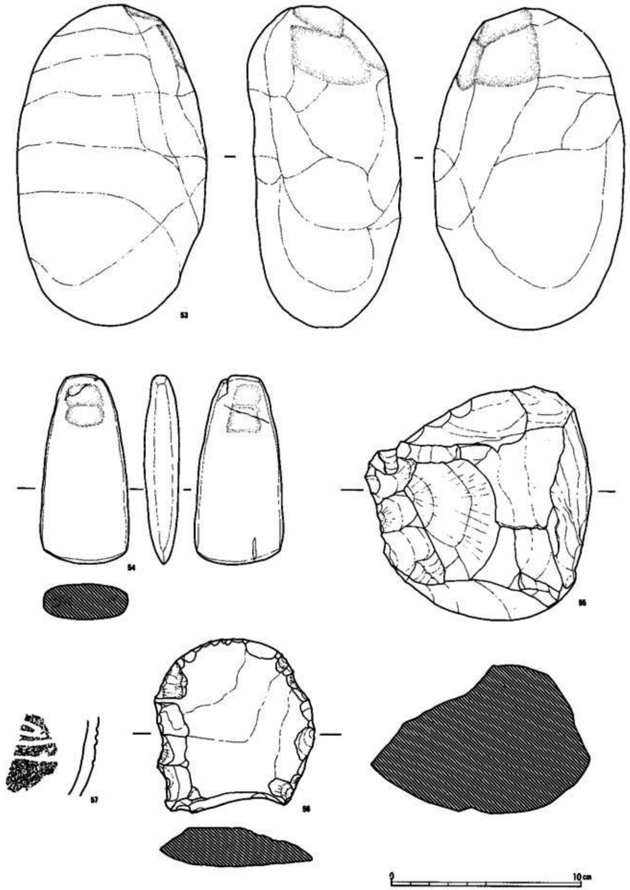
土師器鍋　31はSK1からの出土である。位置的に、SB1に関連した遺物である可能性は高い。磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、口縁はヨコナデで外に強く屈曲させ、端部は内側に折り返されている。体部外面はユビオサエとナデで粗く調整され、内面は板状工具によって調整されている。ただ、剥



第10図　出土遺物実測図(2)（1：2）



第11図　出土遺物実測図(3)（１：２）



第12図　出土遺物実測図(4)（１：２）

離のため明瞭ではなく、内面はハケメ調整であった可能性もある。

32は、いわゆる南伊勢系の鍋である。この種の鍋は、細片ではあるが、数個体ほど出土している。但し、図示できたのはこの１点のみであった。器壁は厚く、胎土も粗い。

33は、ＳＢ３の斜面下位に位置するＫ－９から出土した。小片であるが、土師器鍋のミニチュアと考えられる。

土師器皿　34は、ＳＢ１の排水溝から出土した。土師器皿としては、破片も含めて、本調査で出土した唯一のものである。器壁は薄手だが、胎土は粗い。磨耗・剥離が激しく、調整は不明瞭である。

土錘　４個体出土したが、その内完形に近い３個体を図示した。他の包含層出土遺物から、鎌倉時代前期頃のものと判断される。

施釉陶器椀　38は調査区内からの出土ではなく、付近の山林からの表面採取遺物である。口縁端部に若干の剥離があるものの、完形である。高台はケズリダシで、全面に施釉されている。また、口縁外面に、簡単な絵付けが施される。江戸時代後期頃のものと見られる。

縄文土器片　口縁部付近の小片が１片出土したのみである57。北白川上層に併行する、後期前葉の後半頃の深鉢と見られる。

(2) 石器類

磨石・敲石　図示した39～49と53で、出土ないしは表面採取した石器類の大半を占める。母石は地層中に多く含まれており、周辺の海岸線で容易に入手できるものである。

39は、Ｍ－13包含層から出土した。砂岩の円礫を用いた磨石で、敲石としても使用されている。平坦面と縁部に使用痕跡がある。

40は、Ｌ－12包含層からの出土で、長楕円形の砂岩礫を用いた敲石である。平坦部の一面と、側部の両端に敲打痕跡がある。

41は、Ｌ－11包含層から出土した、長楕円形の砂岩礫を用いた磨石である。過半を欠く。平坦部の一方に使用痕跡がある。

42は、Ｅ－10包含層から出土した。砂岩の円礫を用いた磨石で、敲石としても使用されている。過半を欠く。平坦部に使用痕跡があり、同じ平坦部と側部に敲打痕跡がある。

43は表面採取である。偏平な楕円形の砂岩礫を用いた敲石で、縁部から側部に敲打痕跡がある。

44も表面採取遺物で、小形で偏平な円形の砂岩礫を用いている。側部にわずかながら敲打痕跡がある。また平坦部には使用痕跡があり、磨石としても用いられていた。

45は、試掘坑№３から出土した、偏平な楕円形の砂岩礫を用いた敲石である。平坦部と縁部から側部に敲打痕跡がある。

46は、Ｃ－３包含層から出土した、円形の砂岩礫を用いた敲石である。一部を欠く。平坦部に数か所の敲打痕跡が残る。

47はＬ－13の、また48はＣ－７の包含層から出土した。いずれも円形の砂岩礫を用いた敲石である。平坦部と側部には敲打痕跡がある。また平坦部には使用痕跡もあり、磨石としても用いられていた。

49はＫ－11包含層から出土した磨石で、長楕円形の砂岩礫を用いている。過半を欠く。側部には敲打痕跡も残る。

石錘　50は仮設防災工事のＢ工区の立会調査で、また51はＥ－10の包含層から出土した。いずれも偏平で楕円形の砂岩礫を素材とした礫石錘である。長軸に打撃を加えて凹部を作り出している。魚網の重りに用いたものと考えられる。

52は、Ｌ－11の包含層から出土した。短軸の両端を別方向から打ち欠いている。紐掛けによるとみられる磨滅が、僅かに認められる。

磨製石斧　54は、いわゆる定角式の磨製石斧である。Ｅ－６の包含層から出土した。装着された柄による磨滅痕跡が残る。比重の重い石を用いているが風化も進んでおり、材質についてはわからない。

礫器　55は、Ｅ－10の包含層からの出土である。円形の砂岩礫を用いた敲石を転用したもので、一端に一方向から剥離を加えて片刃の刃部としている。56は、Ｅ－９の包含層からの出土である。砂岩礫から割り出した大型の剥片に、一方向から剥離を加えて刃部としている。

番号	遺構	器種	器形	法量(cm)	成形・調整の特徴	色調	胎土	焼成	残存度(%)	備考	登録番号
1	L−13 包含層	陶器	椀	口：15.8 台：7.7 高：6.3	ロクロ成形 底部糸切り 高台貼り付け	灰色	密 (微砂粒を含む)	良	85	輪花 外面に自然釉 底部内面磨耗	1−4
2	L−13 K−13 包含層	陶器	椀	口：16.0 台：8.1 高：5.8	ロクロ成形 底部糸切り 高台貼り付け	灰色	密	良	85	輪花 高台に籾殻痕跡 内外面に自然釉	1−3
3	L−12 包含層	陶器	椀	口：16.0 台：6.8 高：5.7	ロクロ成形 底部糸切り 高台貼り付け	灰色	密	良	35	灰釉漬け掛け 底部内面磨耗	2−1
4	E−9 SB1	陶器	椀	口：17.4	ロクロ成形	灰色	密 (砂粒を含む)	良	20	灰釉漬け掛け	2−2
5	試堀坑 No.21	陶器	椀	口：15.7 台：8.5 高：5.4	ロクロ成形 底部糸切り 高台貼り付け	灰色	密 (微砂粒を多く含む)	良	完形		3−4
6	L−13 I−10 包含層	陶器	椀	口：16.0 台：7.8 高：5.3	ロクロ成形 底部糸切り 高台貼り付け	灰色	密 (1㎜程の砂粒含む)	良	30	輪花 灰釉漬け掛け	9−3
7	M−12 M−13 包含層	陶器	椀	口：16.2 台：8.1 高：4.8	ロクロ成形 底部糸切り 高台貼り付け	灰色	密	良	90	輪花、底部内面磨耗 内面に自然釉 底部外面に工具痕跡	1−2
8	L−13 M−12 包含層	陶器	椀	口：15.6	ロクロ成形	灰色	密 (微砂粒を含む)	良	50	輪花 灰釉漬け掛け	9−1
9	M−13 包含層	陶器	椀	口：15.9 台：7.6 高：4.8	ロクロ成形 底部糸切り 高台貼り付け	灰色	密 (微砂粒を多く含む)	良	完形	内外面に自然釉 歪み大、釉着あり 高台に籾殻痕跡	1−5
10	L−13 包含層	陶器	椀	口：15.1 台：7.4 高：4.6	ロクロ成形 底部糸切り 高台貼り付け	白灰色	密	良	完形	高台に籾殻痕跡	1−1
11	L−13 K−13 包含層	陶器	椀	口：15.8 台：8.2 高：4.9	ロクロ成形 底部糸切り 高台貼り付け	灰色	密 (砂粒含む)	良	90	内外面に自然釉 歪み大 底部内面磨耗	10−2
12	K−13 包含層	陶器	椀	口：15.6 台：7.8 高：4.8	ロクロ成形 底部糸切り 高台貼り付け	灰色	密 (砂粒を多く含む)	良	90	高台に籾殻痕跡	9−4
13	L−12 包含層	陶器	椀	口：16.0 台：9.0 高：4.9	ロクロ成形 底部糸切り 高台貼り付け	灰色	粗 (細砂粒を多く含む)	良	45	内外面に自然釉 高台に籾殻痕跡	9−2
14	L−13 包含層	陶器	椀	口：15.6 台：7.5 高：5.4	ロクロ成形 底部糸切り 高台貼り付け	灰色	密 (細砂粒を多く含む)	良	40	内外面に自然釉 高台に籾殻痕跡 底部内面磨耗	10−1
15	L−9 包含層	陶器	椀	口：14.8 台：7.3 高：5.2	ロクロ成形 底部糸切り 高台貼り付け	黄灰色	密 (細砂粒を多く含む)	良	70	内面に自然釉 高台に籾殻痕跡	1−6
16	J−12 包含層	陶器	小皿	口：9.2 台：5.1 高：2.1	ロクロ成形 底部糸切り 高台貼り付け	黄灰色	密 (細砂粒を含む)	良	60	内面に自然釉	2−3
17	L−13 包含層	陶器	小皿	口：10.0 台：6.3 高：2.4	ロクロ成形 底部糸切り	灰色	密	良	40		3−2
18	L−10 包含層	陶器	小皿	口：8.0 台：3.8 高：2.2	ロクロ成形 底部糸切り	灰灰色	密 (微砂粒を含む)	良	60		2−5
19	試掘坑 No. 21	陶器	小皿	口：8.0 台：4.5 高：2.1	ロクロ成形 底部糸切り	黄灰色	密 (微砂粒を含む)	良	50		2−6
20	L−11 包含層	陶器	小皿	口：7.9 台：4.2 高：2.2	ロクロ成形 底部糸切り	灰色	密 (微砂粒を含む)	良	50		2−7
21	L−9 包含層	陶器	小皿	口：9.6 台：6.4 高：2.1	ロクロ成形 底部糸切り	灰色	密 (微砂粒を含む)	良	30		2−4
22	試掘坑 No.21	陶器	小皿	口：8.8 台：5.0 高：1.9	ロクロ成形 底部糸切り	黄灰色	密 (微砂粒を含む)	良	25		14−2
23	L−12 包含層	陶器	小皿	口：8.6 台：4.3 高：2.5	ロクロ成形 底部糸切り	黄灰色	密 (細砂粒を多く含む)	良	50	内面に自然釉	3−1
24	試掘坑 No.21	陶器	小皿	口：7.6 台：4.2 高：2.0	ロクロ成形 底部糸切り	黄灰色	密 (微砂粒を含む)	良	50		14−1
25	G−2 包含層	陶器	鉢		ロクロ成形	灰色	密 (細砂粒を含む)	良	小片	内外面に自然釉	11−6
26	L−9 包含層	陶器	鉢		ロクロ成形 外面過半ヘラケズリ	灰色	密 (細砂粒を含む)	良	小片	内面に自然釉	11−5
27	仮設 BI区	陶器	鉢		ロクロ成形	灰色	密 (細砂粒を多く含む)	良	小片	内外面施釉	10−3
28	L−11 包含層	磁器	椀		ロクロ成形 口縁端部外に折り返し	灰白色	密	良	小片	内外面施釉	11−3
29	L−9 包含層	磁器	椀		ロクロ成形 口縁端部外に折り返し	灰色	密	良	小片	内外面施釉	11−4
30	仮設 BI区	陶器	甕	台：13.5	ロクロ成形 底部未調整	灰褐色	密 (砂粒を多く含む)	良	底部 20	外面施釉 内面自然釉	10−4
31	F−9 SK1	土師器	鍋	口：19.6	口縁ヨコナデ 体部外面ユビオサエナデ 体部内面板ナデ？	黄橙色	やや粗 (砂粒を多く含む)	良	口縁 25		11−1
32	K−10 包含層	土師器	鍋	口：20.8	口縁ヨコナデ 口縁端部内側に折り返し	黄橙色	やや粗 (砂粒を多く含む)	良	口縁 20		11−2
33	K−9 包含層	土師器	鍋		口縁ヨコナデ 体部内外面ナデ	黄橙色	やや粗 (砂粒を多く含む)	良	小片	ミニチュア	12−1
34	E−9 SB1	土師器	皿	口：15.4 高：約 3.5	口縁ヨコナデ 体部内外面ユビオサエナデ	黄橙色	やや粗 (砂粒を多く含む)	良	50		3−3
38	表採	陶器	椀	口：10.8 台：5.5 高：5.5	ロクロ成形 高台ケズリダシ	白灰色	密	良	完形	内外面施釉 絵付け	12−6

第2表　出土土器観察表

Ⅳ. 結　語

今回の次郎六郎東遺跡の発掘調査は、数少ない志摩地域での本格的な調査として期待された。しかし、検出された遺構の密度は約2,000㎡と言う調査面積からすれば相対的に希薄で、出土遺物量もわずかであった。

出土ないしは表面採取された遺物の中には、磨製石斧や礫石器などもあるが、縄文土器は小片が１片出土したに過ぎず、この時代の顕著な遺構もないことから、当遺跡を性格付け得るものではない。遺構・遺物は、むしろ12世紀末から13世紀の中頃でよくまとまっており、中世の志摩地域を考える上での、興味深い成果を得ることができたものと考える。

さて第３表は、今回の発掘調査で出土した土器の器種構成を比率で示したものである。個体数の計測は口縁部の形態や底部を指標として行ったが、必ずしも絶対的な数値を表すものではない。しかし綿密な接合を行った結果であり、十分その傾向を窺えるものと考えられる。

そこで注目されるのは、出土遺物の中で、陶磁器の占める割合が、実に91%にも達することである。

器　種	個体数	比率％
山　茶　椀	87	69
山　　皿	21	16.7
陶　器　甕	1	0.8
陶　器　鉢	4	3.2
磁　器　椀	2	1.6
小　　計	115	91.3
土師器鍋	10	7.9
土師器皿	1	0.8
小　　計	11	8.7
合　　計	126	―

第３表　器種構成比率表

そして陶磁器類の中では、山茶椀が69%で最も高く、出土土器全体でもその大部分を占めている。それに対して、土師器鍋は7.9%、陶器甕0.8%、陶器鉢3.2%で、調理・貯蔵と言う生活必需品器種が極端に少ない傾向を読み取ることができる。

これらの土器類は、遺構から出土したものはほとんどなく、その大多数が斜面に堆積した淡褐色土の包含層からの出土である。遺物の出土位置を設定小地区ナンバーで示せばK～M－11、I～M－12、J～M－13で、調査区Bの南端の極めて限られた部分に集中する傾向があった。

当遺跡周辺は、中世以降、人の手が加えられた形跡はなく、攪乱等による遺物の劇的な移動は考えられない。自然崩落を考慮しても、遺物投棄の状況をよく示しているものと判断されるのである。しかし地形的に見て、集中的に出土した遺物とＳＢ３とは直接的な関連を想定することはできない。恐らく、更に上方の、Ａ区とＢ区の中間である調査除外地付近から投棄されたものと考えられる。それに対して礎石建物の周辺からは、ほとんど遺物が出土していないのである。

次に、今回の調査によって、中世前期の礎石建物を３棟確認することができたが、周囲は海の迫った耕地を全く確保できない所であり、しかも斜面に立地している点で、一般的な集落遺跡とはその性格を異にしていると言える。

以上まとめると、次のようになろう。

①出土土器の内、煮沸具などの生活必需品の占める割合が非常に小さい。

②攪乱を受けていないにもかかわらず、住居跡周辺からの遺物の出土数が極端に少ない。

③住居の立地が、海の迫った急斜面である。

これらの点からすれば、検出された建物跡を含めた周辺は、少なくとも恒常的な生活の場であったとは考え難く、極めて臨時性の高い場であったと見なければならないであろう。そして恐らく、中世における志摩地域の生業と、密接に関係しているものと判断できるのである。

第Ⅱ章で述べたように、中世の志摩国では、船による海運・交易活動が盛んであった。しかし当遺跡の立地場所が英虞湾内のいわゆる裏海で、暗礁が多く船の航行・接岸に適さないことから、直接的な関連は薄いものと考えられる。むしろ当遺跡の場合は、現在も盛んな漁労との関係が想定されよう。

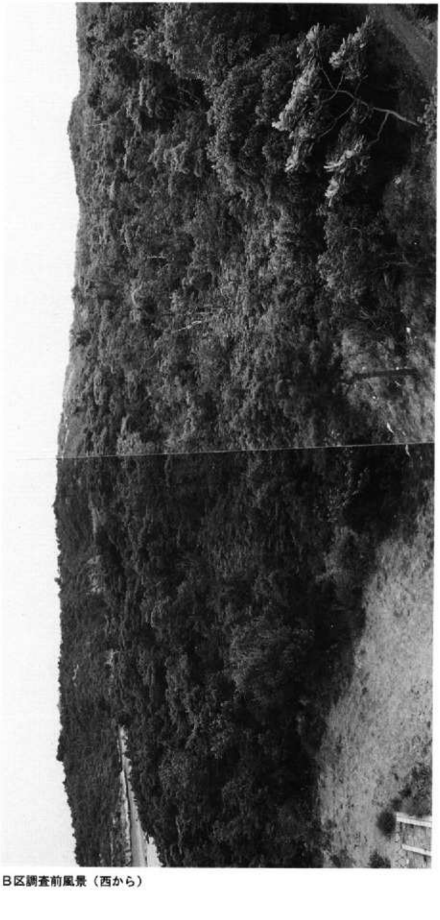
古代の志摩国が海産物の一大供給地であったことは既に触れたが、史料的には極めて少ないものの、中世においても基本的な変化はなかったようである。永万元年（1165）7月8日の答志島御贄送状[⑭]には、「大束鮑・蒸鮑・大布苔」の記載がある。またやや時代は下るが、中世末に成立した『内宮年中神役下行記』[⑮]の正月の条には、「生物・干物」としてイナ（ボラの幼魚）や海老、節（鰹節か）・大魚などの海産物の記述が散見される。特に正月15日条には「うかた（鵜方）より海老三連」とも見えている。

文明12年12月21日に、内宮一祢宜荒木田氏経は、和具の岡氏に対して船越御厨（大王町船越）からの上分を催促する書状[⑯]を送っている。その中で船越御厨の上分は、「年始最初御神事」「元日」「祢宜・祠官并諸役人」の饗料であるとされている。このことから、『内宮年中神役下行記』に見える海産物や「酒肴」は、大部分を志摩国の、しかも船越御厨からの上分に依っていたものと考えられるのである。以上のことから判断すれば、今回の調査によって検出された礎石建物は、漁労のための臨時的な施設であったと、ほぼ断定できるものと考えられる。そして、今も志摩地域で見られる共同使用の磯小屋や海女小屋と、系譜的なつながりを想定することも可能と思われる。

いずれにしろ志摩地域の海岸線においては、こうした漁労と関連する小規模な遺跡が、今後多く発見される可能性の高いことは否定できないであろう。そして、調査の進展によって、さらにに中世志摩国での漁労活動を具体的に明らかにできる成果の得られることに期待したい。　　　　（小林　秀）

（註）

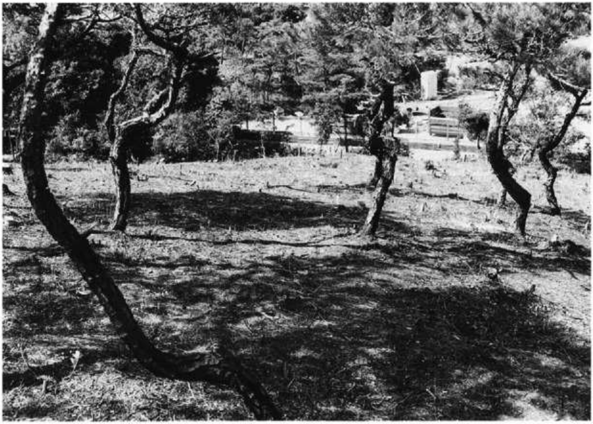
① 田村陽一『佐々木武門考古資料図録』（大王町教育委員会　1994年）
② 『平城宮発掘調査出土木簡概報』6（奈良国立文化財研究所）
③ 『平城宮木簡』1　344号木簡（奈良国立文化財研究所）
④ 『平城宮木簡』4　4657号木簡（奈良国立文化財研究所）
⑤ 増補改訂『国史大系』所収
⑥ 『万葉集』巻1　40～42番（日本古典文学大系　岩波書店）
⑦ 小玉道明・下村登良男ほか『志摩・おじょか古墳発掘調査概要』（阿児町教育委員会　1968年）
　『紀伊半島の文化史的研究』（関西大学文学部考古学研究第6冊　1992年）
⑧ 『伊勢神宮影印叢書』（八木書店）所収
⑨ 稲本紀昭「伊勢・志摩の交通と交易」（海と列島文化8『伊勢と熊野の海』　小学館　1992年）
⑩ 『光明寺古文書』建武3年7月23日付け駿河国江尻住人定願用途請取状案（『日本塩業大系』古代中世史料編2）
⑪ 『光明寺古文書』建武4年6月9日付け祭主使新家春真告状案（『日本塩業大系』）
⑫ 『光明寺古文書』建武4年6月付け尼法宗申状写（『日本塩業大系』）
⑬ 『光明寺古文書』元弘3年6月26日付け泊浦小里住人犬法師太郎和与状案（『日本塩業大系』）
⑭ 『勧修寺本永昌記裏文書』（『平安遺文』3360号）
⑮ 大神宮叢書『神宮年中行事大成』前編所収
⑯ 『内宮引付一祢宜氏経記』文明12年12月21日付け荒木田氏経書状（東京大学史料編纂所所蔵写本）



B区調査前風景（西から）

A区調査前風景（南から）

A区伐開後風景（南から）



B区伐開後風景（東から）

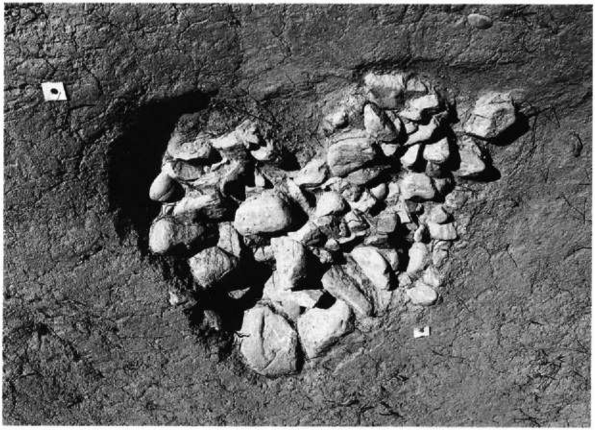
B区調査作業風景（東から）

B区全景（南西から）

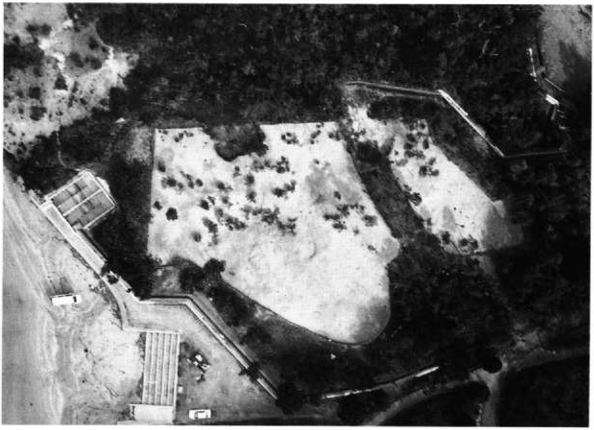
A区全景（南から）

SB1・2（南西から）

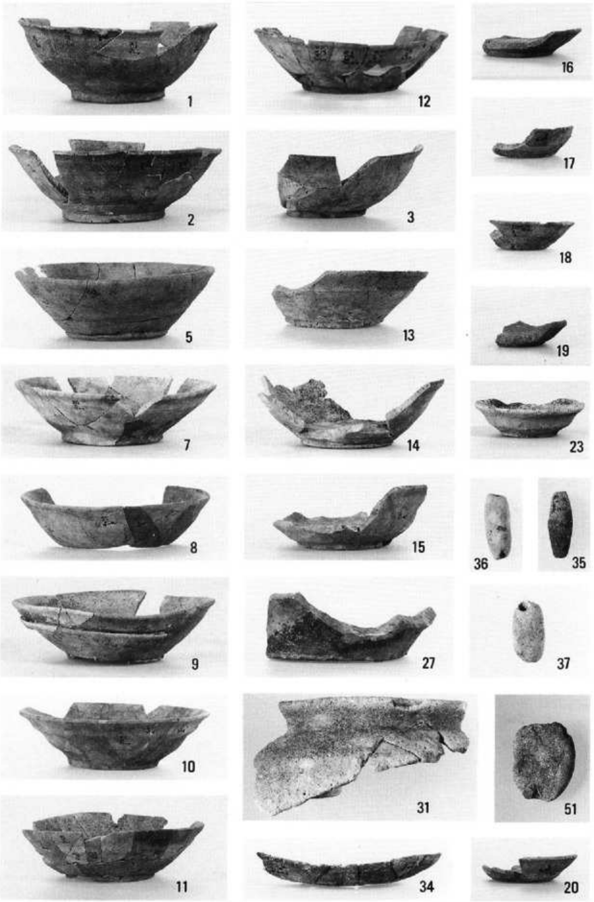
SB2（南西から）



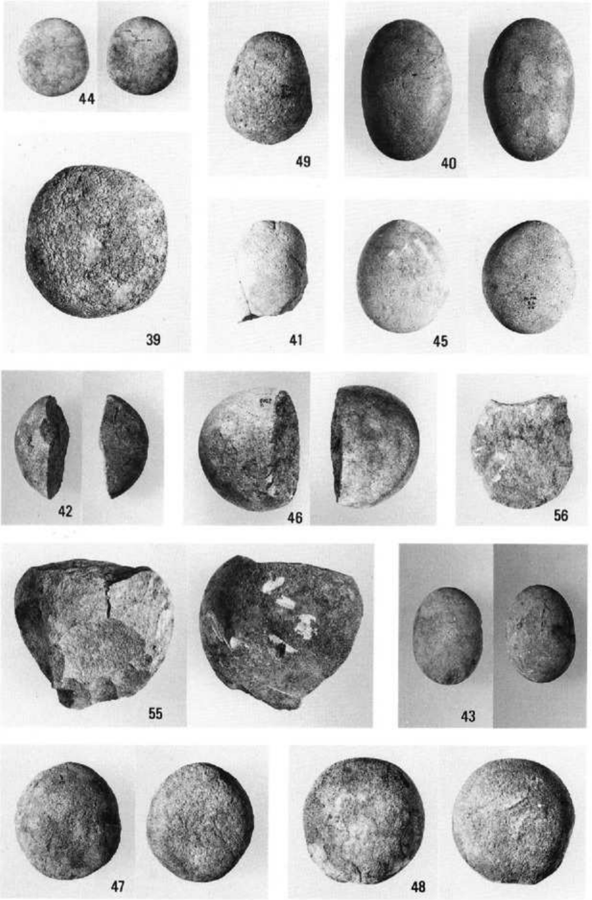
集石遺構



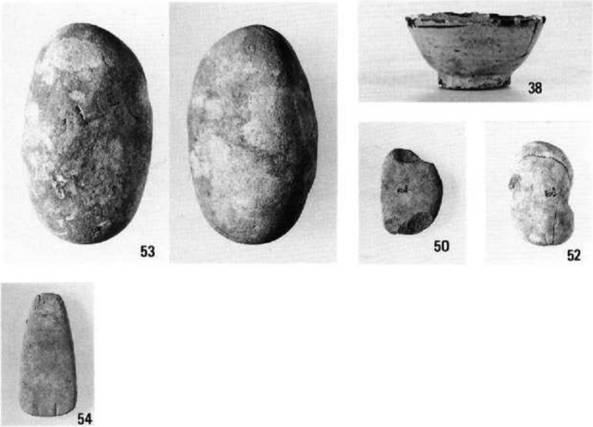
調査区全景



出土遺物(1)（1 : 3）



出土遺物(2) (1 : 3)



出土遺物(3)（1：3）

遺跡遠景（南西から）

登茂山全景

遺跡遠景

報告書抄録

ふりかな	じろうろくろうひがしいせき
書名	次郎六郎東遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小 林　　秀
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-03　三重県多気郡明和町竹川５０３
発行年月日	西暦１９９６年3月３１日

ふりかな 所収遺跡名	ふりかな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
次郎六郎東(じろうろくろうひがし)遺跡	三重県志摩郡(みえけんしまぐん) 大王町船越字(だいおうちょうふなこしあざ) 次郎六郎(じろうろくろう)	24522		34度 18分 6秒	136度 50分 13秒	19951002 ～ 19960112	2,000	郵政省伊勢志摩リゾート施設建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
次郎六郎東遺跡	その他	縄文時代後期 鎌倉時代前期	集石　1基 礎石建物　3基	陶器椀、陶器皿、土師器鍋、土師器皿、磨石、敲石、石斧	

平成8(1996)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年7月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 145

次郎六郎東遺跡

1996(平成八年)年3月31日

編集
発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 光出版印刷株式会社